

人は何について感謝しているか

大学生とその親がいただく感謝の内容と相手

佐竹真次

What do they thank whom for ? Answers from college students and parents

Shinji SATAKE

Abstract : A hundred college students (10 males and 90 females) and their parents (41 fathers and 59 mothers) listed three events and the acceptors of their thanks. Contents of the 300 responses from the students and those from the parents were divided into 35 categories, and semantically classified into two large categories "support" and "satisfaction". The mean responses to 15 categories of thankfulness for "support" were 18.3 among students, and 11.1 among parents, showing the tendency that students responded more to thankfulness for "support" than parents did. On the other hand, the mean responses to 20 categories of thankfulness for "satisfaction" were 1.3 among students, and 6.7 among parents, showing that parents responded more to thankfulness for "satisfaction" than students did. There was a clear distinction between the acceptors of the thanks from the students and those from the parents. The acceptors were mainly "friends", "teachers" and so on for students, whereas mostly "family" for parents. The mean ages when students thanked did not vary with categories of thankfulness, but those of parents varied from the past up to the present with categories.

Key Words : thankfulness, support, satisfaction, college students, parents

はじめに

「感謝」は対人的相互作用における重要なコミュニケーション行動のひとつであり、一般書籍¹⁾や学校教科書²⁾などにおいて言及されることも多い。

発達的には、「感謝」のことばのひとつである「ありがとう」ということばが自発されるのは2歳1カ月頃であるとされる³⁾⁴⁾。幼児はそれを成人の模倣あるいは親のしつけによって次第に覚えると考えられている⁴⁾。一方、自閉症児では、自分の

要求した物品が提供されたときに、自発的に「ありがとう」ということばが表出されることはほとんどみられない。そのような理由から、数名の自閉症児に一定の文脈を設定して「ちょうだい」と「ありがとう」ということばの表出を訓練した研究がある。その結果、それらのことばの形は獲得しても、「ちょうだい」と言うべきところで「ありがとう、ちょうだい」と言ったり、「ありがとう」と言うべきところで「ちょうだい、ありがとう」と言ったりするなど、自閉症児においてはそれらのことばが区別されにくく、ごく一部の自閉症児だけが「ありがとう」ということばをほぼ正しい意味で表出できるようになったことが報告された⁵⁾。この問題は、自閉症児が他者の心的状態や信念を推定することに障害をもつとされる「心の理論」

山形県立保健医療大学 作業療法学科
〒990-2212 山形市上柳 260
Department of Occupational Therapy
Yamagata Prefectural University of Health Sciences
260 Kamiyanagi, Yamagata 990-2212, Japan

の障害⁶⁾とも関連しているかもしれない。

また、「感謝」は適切な社会的行動を行った人を強化する役割を持つ⁷⁾。しかし、適切な社会的行動を行っても「感謝」が提示されない状況が続くと、無力感に陥り、そのような状況を極端に長く経験している人たちにおいては、その自殺率が、他と比べても高くなることが明らかとなっている。たとえば、医師の中でも自殺に結びつきやすい特定の医師層があることが知られている。少々古いデータではあるが、アメリカの医師の専門科別自殺率によれば、自殺率が高いものは精神科医、麻酔科医などとなっている。精神科医は、精神症状、神経症症状をもった患者にもっぱら接している。麻酔科医は、緊張の続く手術時に加え、終末期にあり苦痛の激しい患者など困難なケースの苦痛のコントロールを任されている。こうした患者は完全治療には至らないことも多いため、関わりの中で患者から「感謝」される機会が少なく、医師としては消耗しやすいものがある。これらに対して、産婦人科医などは、出産というめでたい場面に遭遇し、患者からは「感謝」されることが多いので、比較的心身の健康状態は良好でいられるのであろう、とされている⁸⁾。

また、藤原³⁾は、2歳4カ月の孫との次のようなエピソードを紹介している。「私がN(孫)のおねまきの一カ所をたどたどしく繕った。するとNは『もう、なおった?』/祖父(著者)『はい』/N『ありがとう』/この無邪気な感謝に私は胸を突かれるような気がした。無邪気とか純真とかのことばも、むざむざとは使えないように思えた。」この記述は、「ありがとう」という発言が相手の心に感動と喜びをもたらすさまを映し出している。

以上のように、「感謝」は対人的相互作用における重要なコミュニケーション行動であるにもかかわらず、これまで学術的に研究されることはほとんどなかった。そこで本研究では、ほとんど基礎データが得られていないこの領域において、大学生が感じやすい「感謝」の内容と相手、ならびに親が感じやすい「感謝」の内容と相手に関して、それぞれの傾向とその違いを明らかにすることを目的として、記述式アンケートによる調査を実施した。

方 法

1. 対 象 者

18歳から26歳までの医療系大学生100名(男10名,女90名)。平均年齢は18.8歳(標準偏差は1.3)。ならびに、それらの大学生の親100名(父41名,母59名)。平均年齢は47.5歳(標準偏差は3.9)。年齢範囲は40歳から58歳。

2. 手 続 き

学生本人とその親に対して、以下の内容でのアンケート調査に協力を依頼した。

回答者無記名、回答者性別記入、回答者年齢記入、学生との関係記入。

質問:「最近『感謝に思っていること』『ありがたいと感じていること』を、さしつかえのない範囲で3つ書いてください。内容は最近のことでも過去のことでも、過去から最近までずっと連続していることでも、事柄でも状態でも、小さなことでも大きなことでも、何でも結構です。」

回答欄:「どのようなこと(内容)()を、だれ(何)()に対して感謝している or ありがたいと思っている(または、感謝した or ありがたいと思った)。それはあなたが何歳ぐらいのときのことでしたか?〔)歳ぐらいだった。」(この回答欄を3組用意した。)

その他:「何かご意見があれば〔)」

以上のように3組の回答欄を用意した理由は、1つの「感謝」だけに限定すれば、どれを記載したらよいか迷ってしまうであろうし、逆に、あまり多くなり過ぎると、回答することに負担がかかり過ぎてしまうであろうと考えたからである。本調査では、回答者の各世代における思い浮かべやすい回答内容の大まかな傾向を把握することを目的としているので、回答者が比較的気軽に回答できるように、過度な厳密性を課さないことにした。

なお、回答欄の「感謝している」と「ありがたいと思っている」(同様に、「感謝した」と「ありがたいと思った」)は同じ意味であるとみなして並記した。

結 果

1. 「支援系」感謝と「充実系」感謝

アンケートに記載された学生の回答300個と親

の回答 300 個を、整理する経過の中で作成された 35 個の「感謝の内容」の項目（表 1）に分類した。さらに、それらのカテゴリーを意味的に「支援系」と「充実系」に分類した。「支援系」は「折々のニーズに応じて他者から受ける支援に関連する項目群」であり、「充実系」は「すでに存在し生活を充実させているさまざまな好条件に関連する項目群」であると定義した。

学生と親の「感謝」の主な内容と回答数を図 1 に示した。学生の 300 回答のうち「支援系」感謝 15 項目の回答数合計は 275 個、「充実系」感謝 20 項目の回答数合計は 25 個であり、「支援系」感謝の回答数が「充実系」感謝の回答数よりも圧倒的に多かった。一方、親の 300 回答のうち「支援系」感謝 15 項目の回答数合計は 167 個、「充実系」感謝 20 項目の回答数合計は 133 個であり、「支援系」

表 1 感謝の内容の定義

支 援 系	充 実 系
励まし：至らない自分を励まし、気持ちの面で支えてくれること。心配し、見守ってくれること。一緒に喜んでくれること。	人の存在：特定の人物が存在してくれること（生まれてくれたこと、成長してくれたこと、出逢えたことなどをも含む）。
援助：経済的、物的、物理的に困っているときに、援助してくれること。大学に行かせてくれることなどをも含む。	人の健康：特定の人物が健康・幸福でいてくれること。
養育：大人（親）が子どもを養育・教育・世話すること。（教育に関しては高校まで）	自分の存在：自分が存在していられること（生まれてこられたこと）。
相談：問題を抱えているときに、話し相手になって、解決の糸口を見出すのを助けてくれること。悩みを聞いてくれること。	自分の健康：自分が健康でいられること。感動する感性があること。
物品提供：思いがけなく物品を提供してくれること。貸していたものを返してくれること。	思い出：過去の出来事についての思い出があること。
助言：判断に迷っているときに、適切な助言をしてくれること。	環境：過去や現在の安全で快適な環境条件（地域社会や国家や交通）が備えられていること。
指導：目的を示し、教え導いてくれること。	気晴らし：自由時間や気晴らしして気分を変えることのできる余裕があること。
看病・治療：自分が病気のときに看病や治療をしてくれたこと。	救済：自分の犯したあやまち・罪を救ってくれたり見逃してくれたりすること。
救助：自分が身体的危機状況にあるときに、救ってくれたこと。	安定生活：家計が支えられ、特に不自由なく、安定した生活ができること。
情報提供：必要なときに有益な情報（機会も含む）を提供してくれること。	友達関係：仲間関係・近隣関係において、仲間に加えてくれて、優しく付き合ってくれること。
代役：自分の都合が悪いときに、代理として役割を果たしてくれたこと。	家事：家庭の衣食住、その他生活に必要なことについて整えてくれること。
時間提供：自分と一緒にいる時間を提供してくれること。	仕事：生業とする仕事があること。
叱責：必要なときに叱ってくれること。	家庭の平和：家庭が精神的に安定しており、平和であること。
手伝い：そばにいて、必要なときに手伝ったり便宜をはかったりしてくれること。	成功・合格：事業や計画に成功すること。試験に合格すること。
小さな親切：落とした財布を拾ってくれたりすること。	遊び相手：遊び相手になったり、行楽に連れて行ったりしてくれること。
	人の労働：人の社会的労働が自分や周囲の人に恩恵をもたらしてくれること。
	生きがい：生きがいや人生の目的があり、人生に張り合いがもてること。
	自分の結婚：自分が結婚に導かれたこと。結婚を維持できていること。
	子供の結婚：自分の子どもが結婚に導かれたこと。結婚を維持できていること。
	信頼：自分を信頼し、大役を自分に依頼してくれたこと。社会的承認。

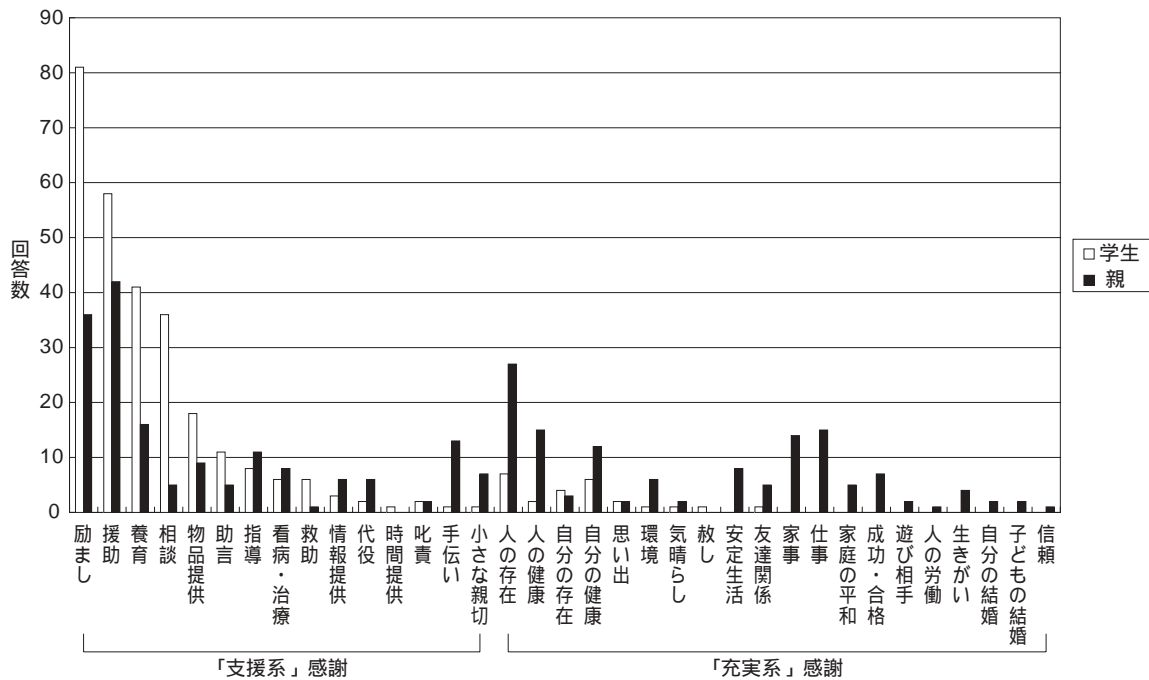


図 1 大学生と親の「感謝」のおもな内容と回答数

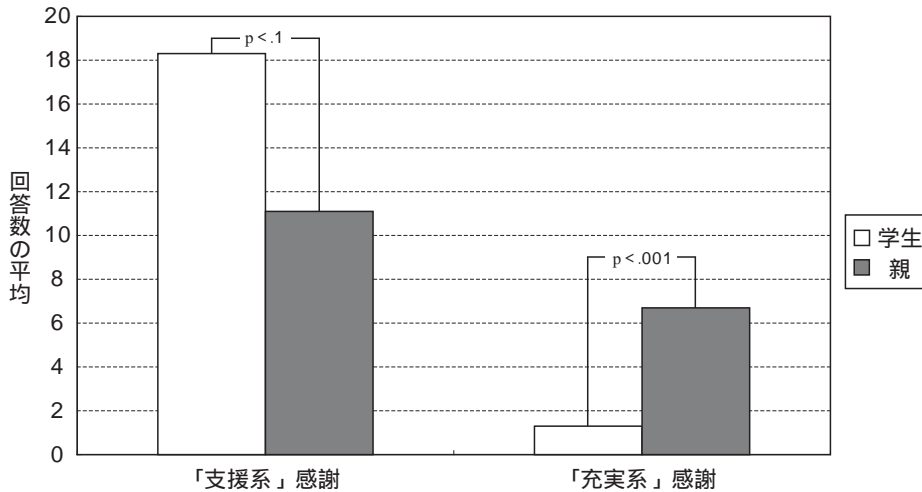


図2 学生と親における「支援系」感謝と「充実系」感謝の回答数の平均

感謝の回答数が「充実系」感謝の回答数よりも若干多かった。

2. 回答数の多い感謝の内容項目

各項目のうち回答数が10個以上であったものについてみると、学生では「励まし(81)」「援助(58)」「養育(41)」「相談(36)」「物品提供(18)」「助言(11)」であり、すべてが「支援系」感謝であった。一方、親では「援助(42)」「励まし(36)」「人の存在(27)」「養育(16)」「人の健康(15)」「仕事(15)」「家事(14)」「手伝い(13)」「自分の健康(12)」「指導(11)」であり、うち5項目が「支援系」感謝、他の5項目が「充実系」感謝であった。

図2より、「支援系」感謝15項目における学生と親の回答数の平均をみると、学生で18.3(標準偏差24.6)、親で11.1(標準偏差12.2)であり、学生の方が親よりも多くの「支援系」感謝について回答する傾向がうかがわれた($t=1.78, df=14, p<.1$)。一方、「充実系」感謝20項目における学生と親の回答数の平均をみると、学生で1.3(標準偏差2.1)、親で6.7(標準偏差6.8)であり、親の方が学生よりも多くの「充実系」感謝について回答していた($t=-4.1, df=19, p<.001$)。

3. 感謝の相手

学生または親において15個以上の回答数があった項目(感謝の内容)とその感謝の相手を表2に示した。アンケートで回答された家族のメンバーの種類を「親」「父」「母」「家族」「配偶

者」「子ども」「きょうだい」に分類したが、本文中ではこれらを包括的に「かぞく」と表記した。

学生からの回答数のもっとも多かった「励まし(81)」の感謝の相手は「友達(38)」がもっとも多かった。次に、「かぞく(27)」「親(13)」「母(5)」「家族(9)」であった。そして次に「先生(7)」であった。一方、親の回答の「励まし(36)」の感謝の相手は「かぞく(18)」「親(4)」「母(2)」「家族(6)」「配偶者(3)」「子ども(3)」が多く、「友達(7)」はあまり多くはなかった。学生の場合と異なり、親の場合は「かぞく」として「配偶者」と「子ども」が加わる。

学生の回答の「援助(58)」の感謝の相手は「かぞく(42)」「親(31)」「父(3)」「母(5)」「家族(3)」が多く、なかでも「親」が多くを占めていた。「友達(7)」は多くはなかった。一方、親の回答の「援助(42)」の感謝の相手も「かぞく(20)」「親(3)」「父(1)」「母(5)」「家族(2)」「配偶者(5)」「子ども(2)」「きょうだい(2)」が多いが、学生の場合と異なり、「配偶者」「子ども」「きょうだい」が加わる。「かぞく」に近い相手として「親戚(6)」もみられた。「友達(5)」は多くはなかった。

学生の回答の「養育(41)」の感謝の相手は、当然のことながらすべてが「かぞく(41)」で、そのほとんどが「親(18)」「母(19)」であった。親の回答の「養育(16)」の感謝の相手についても「かぞく(14)」が多く、そのほとんどが「親(7)」「父(2)」「母(2)」などであった。「配偶者(1)」は回答者の子どもの養育の感謝の相手として回答されたものであった。

学生の回答の「相談」(36)の感謝の相手は、「友達」(23)が多くを占め、次に「かぞく」(10)で、そのほとんどが「母」(6)と「家族」(3)であった。「先生」(3)は多くはなかった。一方、親の回答に「相談」(5)の感謝自体が少なく、その相手は「友達」(3)などであった。

学生の回答の「物品提供」(18)の感謝の相手は、「友達」(7)、「かぞく」(9)、「親」(4)、「母」(4)、「家族」(1)などであった。一方、「物品提供」の感謝についての親の回答数はわずか9個であった。

「人の存在」の感謝についての学生の回答数はわずか7個であった。一方、親の回答の「人の存在」(27)の感謝の相手は、そのほとんどが「子ども」(21)であった。

「人の健康」の感謝についての学生の回答数はわずか2個であった。一方、親の回答の「人の健康」(15)の感謝の相手は「かぞく」(10)が多く、「家族」(4)、「配偶者」(2)、「子ども」(3)などであった。

学生の回答には「仕事」の感謝は0個であった。一方、親の回答の「仕事」(15)の感謝の相手は「かぞく」(8)、「家族」(6)、「配偶者」(2)、「その他」(6)などであった。

以上をまとめると、「励まし」の感謝の相手は、学生では「友達」、「かぞく」、「先生」の順であるのに対して、親ではほとんどが「かぞく」であった。

「援助」の感謝の相手は、学生でも親でも「かぞく」が多かった。ただし、親の場合は学生の場合と異なり、「配偶者」「子ども」が「かぞく」に加

わる。

「養育」の感謝の相手は、学生、親ともに「親」「母」「父」がほとんどであった。

「相談」の感謝の相手は、学生では「友達」が多く、次に「かぞく」であった。親では「相談」の感謝自体が少なかった。

「物品提供」の感謝の相手は、学生では「友達」と「かぞく」が主であった。親では「物品提供」の感謝自体が少なかった。

「人の存在」の感謝の相手は、学生では少なく、一方、親では多く、そのほとんどが「子ども」であった。

「人の健康」の感謝の相手は、学生ではわずか、一方、親では「かぞく」が多かった。

「仕事」の感謝の相手は、学生にはなく、一方、親では「かぞく」が比較的多かった。

4. 感謝した年齢

その内容を感謝した年齢の平均についてみると、平均年齢 18.8 歳の学生においては、「養育」「人の存在」「励まし」「相談」「人の健康」「物品提供」「援助」で 16.8 歳～ 18.3 歳となっていた。一方、平均年齢 47.5 歳の親においては、「養育」で 27.9 歳、「相談」「励まし」「援助」で 34.0 歳～ 36.9 歳、「人の健康」「仕事」で 39.0 歳～ 39.5 歳、「人の存在」「物品提供」で 44.1 歳～ 47.3 歳となっていた(表 2)。

意見欄に回答した人は全体の約 2 割であった。

表 2 大学生または親において 15 個以上の回答数があった項目(感謝の内容)とその感謝の相手、ならびにその内容を感謝した年齢

感謝の内容	学生 / 親	回答数	その内容を感謝した年齢の平均(SD)	感謝した相手ごとの回答数										
				友達	親	父	母	家族	配偶者	子ども	きょうだい	親戚	先生	その他
励まし	学生	81	17.0(2.5)	38	13	-	5	9	-	-	-	-	7	9
	親	36	36.4(13.6)	7	4	-	2	6	3	3	-	-	1	10
援助	学生	58	18.3(2.6)	7	31	3	5	3	-	-	-	-	1	8
	親	42	36.9(11.3)	5	3	1	5	2	5	2	2	6	-	11
養育	学生	41	16.8(3.4)	-	18	-	19	4	-	-	-	-	-	-
	親	16	27.9(10.8)	-	7	2	2	1	1	-	1	1	-	1
相談	学生	36	17.0(2.2)	23	1	-	6	3	-	-	-	-	3	-
	親	5	34.0(12.3)	3	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
物品提供	学生	18	18.2(2.3)	7	4	-	4	1	-	-	-	-	-	2
	親	9	47.3(3.9)	-	2	-	2	-	1	3	-	1	-	-
人の存在	学生	7	16.8(2.7)	3	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-
	親	27	44.1(9.5)	-	-	-	-	3	1	21	-	-	-	2
人の健康	学生	2	17.0(12.7)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
	親	15	39.0(9.4)	-	1	-	-	4	2	3	-	-	-	5
仕事	学生	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	親	15	39.3(8.8)	1	-	-	-	6	2	-	-	-	-	6

これらの意見を大まかに分類すると, 「感謝のイベントは思い出すことが案外難しい。」「改めて感謝する心を認識させられた。」「その他」であった。

考 察

1. 感謝の発達

藤原³⁾の観察によれば, 「ありがとう」という孫の発言は2歳1カ月ごろから出現した。エピソードとしては「母が外出から, N(孫)のソックスを買って帰る。N『ありがとう。はいてみる』』というもので, 「物品提供」についての感謝の表明であった。次に, 冒頭に上げた2歳4カ月の「ありがとう」のエピソードが記録されている。これは, いわば「援助」についての感謝の表明であった。次に2歳6カ月のエピソードで, 「おじいちゃん, これ(アメ)かってくれて, ありがとう」という「物品提供」についての感謝の表明も記録されている。また, 同じく2歳6カ月で, 「かいて(帰って), おじいちゃん, ありがとう」という, 祖父が旅行から無事に帰ってきてくれたこと, つまり「人の健康」についての感謝の表明も記録されている。さらに, 4歳4カ月で, K(孫)が「行ってまいります」と言ったので, 祖父母が「行ってらっしゃい。気をつけてね」と言った。Kは「ありがとう」と言った, と記録されており, 「励まし」についての感謝の表明も可能であることがわかる。このように, 幼児期においてもすでに「支援系」だけでなく「充実系」の感謝も表明できるようになっていることがうかがわれる。

しかしながら, 今回の調査のように, 回答者が真っ先に心に浮かんだ3項目を上げるとなると, やはり各自の日頃意識しやすい感謝の内容や相手の傾向が, 各年代によって微妙に異なることが示された。

2. なぜ学生には「支援系」感謝が多く、親には「充実系」感謝が多いのか?

学生では「支援系」の感謝が「充実系」よりもはるかに多く, 一方, 親では「支援系」の感謝と同様に「充実系」の感謝も多くみられる。ハヴィガースト(Havighurst, R. J.)⁹⁾の発達課題に言及するまでもなく, 青年期にある大学生は自我同一性の確立や職業選択, 両親からの情緒的・経済的独

立, 社会的に責任のある行動の遂行, 価値や倫理の体系の獲得, 異性との洗練された交際, 結婚と家庭生活の準備等を目指す途上にあり, さまざまな活動を経験したり知識を習得したりしている。また, 彼らを取り巻く状況は刻々と大きく変化している。そのような中では, 他者からの励ましや相談にのってもらうことに関するニーズが非常に大きいと考えられる。それと同時に, 自分が親から支援を受け, 養育されている立場にあることをも認識している。

一方, 親はそれらのものをすでに獲得し, それらを保護したり維持したり満喫したり発展させたりすることに関心をもつ。ハヴィガースト⁹⁾の発達課題を参照すれば, 大人としての市民的・社会的責任の達成, 一定の経済的水準の確立と維持, 青年たちへの感化, 余暇活動の充実, 配偶者との深い結びつき等が重要な課題となる。親における「充実系」の感謝の多さは, そのような親の保守的傾向と関連していると思われる。

3. なぜ学生と親とでは感謝の相手に差が生ずるのか?

学生が自己の能力や社会的領域の拡大を目指す中で, 友達との相互交渉はとりわけ大きなウエイトを占める。学生が回答した「支援系」感謝の中でも, 「励まし」「相談」「物品提供」の感謝の相手が主に「友達」であったことはそのことと関連していると考えられる。「励まし」や「相談」は時間的コストはかかっても経済的コストはあまりかからない。したがって, 「友達」にとってはそれらを提供することが容易である。しかしながら, 怒濤の青年期を航海している学生にとってそれらは羅針盤や灯台ともいえるほどに貴重な資源である。一方, 比較的経済的コストのかかる「援助」「養育」の感謝の相手が「親」を中心とする「かぞく」となることは当然のことではあるが, これらの回答数は多く, 「親」たちからの援助や養育に対する感謝の気持ちを学生たちが強く感じていることは明らかである。

親はすでに社会的に自立しており, 生活力があるので, 友達からの援助や相談を必要とする場合は多くないと思われる。親の回答の「励まし」「援助」「養育」「人の存在」「人の健康」「仕事」の感謝の相手はほとんどが「かぞく」であった。中で

も「人の存在」「人の健康」の感謝の相手は「子ども」であった。このように、親は家族志向であることが明らかで、とくに子どもの存在や健康に強い関心をもっていることがうかがわれる。「仕事」の感謝の相手についてさえも「かぞく」とする回答が多い。その内容は「仕事ができるのも家族の理解と協力のおかげである」というものがほとんどであった。

4．学生と親における感謝の年齢の特徴

その内容を感謝した年齢の平均についてみると、学生においては、「養育」「人の存在」「励まし」「相談」「人の健康」「物品提供」「援助」で2年前からほぼ現在までの間に位置している。一方、親においては、「養育」で約20年前、「相談」「励まし」「援助」で約10～13年前、「人の健康」「仕事」で約8年前、「人の存在」「物品提供」で3年前から現在となっていた。このように、若い学生においては、人生経験の時間的長さが短いこともあり、感謝の内容の種類によって時間的なばらつきが少ないが、親においては、「養育」のように遠い過去の時点で感謝した印象をもつものから「援助」や「人の健康」のように比較的最近の時点で感謝した印象をもつものまで広い幅があることが示された。

親の場合について解釈すると、「養育」についての感謝は、成人として自立し、自分の成育の筋道を顧みる余裕をもてるようになった時点で感じられるという性質があるために、約20年前という遠い過去となっているのかもしれない。「相談」「励まし」「援助」についての感謝は、人生の中でも比較的大きな危機状況乗り越えるためのきっかけとなったことに対して意識される可能性があり、そのような危機状況は10年前後の過去にさかのぼって主観的にとらえられる傾向があるのかもしれない。「人の健康」についての感謝は家族の病気等の経験に関連しているのかもしれないし、「仕事」についての感謝は近年のリストラ等に関する危機的経験に関連しているのかもしれない。そしてこれらはごく最近ではないにしても、そう古い経験でもないため、約8年前ぐらいと意識されやすいのかもしれない。それらに比べ、身近な「人の存在」についての感謝はいつでも意識することが可能であり、また具体性の高い「物品提供」に

についての感謝は最近のできごとの記憶の中から想起しやすいために、現在に最も近い時点に位置づけられるのかもしれない。

本研究では大学生とその親のみを対象としたが、小学生、中学生、高校生、20歳台後半、30歳台、60歳台、70歳台、そして80歳台以上などの他の年齢段階でも、また未婚と既婚の異なりでも、さらに性の異なりでも、感謝の内容と相手に関して傾向の違いが示される可能性が高い。今回の結果から推測すると、年齢段階が進むにつれて「充実系」感謝の回答の頻度が高くなるように思われるが、その検討は今後の継続研究に期待されるところである。

5．感謝を記述することによる気づきの促進

このようなアンケートによる気づき促進の副次的効果も窺われた。それは意見欄に記入された各人の意見によって推測され、おおむね2種類に大別された。それらは、「感謝のイベントは思い出すことが案外難しい。」「改めて感謝する心を認識させられた。」であった。このように感謝のイベントと相手を記述することによって感謝に対する感受性が高まり、感謝の言語的・非言語的行動がコミュニケーションの受け手から多く表出されるようになれば、送り手の発信行動は強化され、その後の親和的な相互作用が一層活発に展開されるようになるとも考えられる。

6．今後の展望

今回の回答者の思い浮かべやすい感謝はほとんどが人への感謝となっており、神仏への感謝に言及した回答者はわずかであったが、欧米などでは神に感謝するという価値観がより鮮明に示されるかもしれない。また、今回の回答者の若者には友達と家族への感謝を表明する者が多く、親には家族への感謝を表明する者が多い。諸外国では友達や家族以外の人々への感謝も多く示されるかもしれない。その傾向は日本人とは異なるかもしれない。そのように、文化の違いによる感謝の意識の違いを明らかにすることは、今後に残された大きなテーマのひとつとなる可能性がある。

謝 辞

本研究の趣旨をご理解くださり、アンケートに

ご協力くださいました皆様に心から感謝申し上げます。

文 献

- 1) 中谷彰宏:幸せば「ありがとう」の中にある,東京,海竜社,2003.
- 2) 水谷 修:“日本語を考える”.文部省検定済教科書・小学校国語科用 国語5下,東京,教育出版,pp.98-100,1995.
- 3) 藤原与一:幼児の言語表現能力の発達,広島,文化評論出版,1977.
- 4) 大久保愛:幼児言語の発達,東京,東京堂出版,1967.
- 5) 大野裕史,進藤桂子,柘植雅義,溝上浩一,山田千枝,吉元英志,三浦 剛:発達障害児における「ちょうだい」-「ありがとう」言語連鎖の形成 ~ .日本特殊教育学会第25回大会発表論文集:532-537,1987.
- 6) Baron-Cohen, S.: Mindblindness: An essay on autism and theory of mind. MIT Press, 1995. 自閉症とマインド・ブラインドネス,長野 敬,長畑正道,今野義孝 訳,東京,青土社,1997.
- 7) 杉山尚子,島 宗理,佐藤方哉,R. W. マロット, M. E. マロット:行動分析学入門,東京,産業図書,pp.271-287,1998.
- 8) 宗像恒次,稲岡文昭,高橋 徹,川野雅資:“診療科別にみた医師の自殺率”,燃えつき症候群,東京,金剛出版,pp.15-16,1988.
- 9) Havighurst, R. J.: "Human development and education." New York, Longmans, Green, 1953. 人間の発達課題と教育,荘司雅子 訳,東京,玉川大学出版部,1995.

2003.10.31 受稿,2004.1.14 受理

要 約

大学生100名(男10名,女90名)とその親100名(父41名,母59名)に対し,アンケートの形式で,最近「感謝に思っていること」と「その感謝の相手」ならびに「そのときの年齢」を3件ずつ記載してもらった。学生の回答300個と親の回答300個の内容を35項目に分類し,さらにそれらを意味的に「支援系」と「充実系」に分類した。「支援系」感謝15項目における回答数の平均は,学生で18.3,親で11.1であり,学生の方が親よりも多くの「支援系」感謝について回答する傾向がうかがわれた。一方,「充実系」感謝20項目における回答数の平均は,学生で1.3,親で6.7であり,親の方が学生よりも多くの「充実系」感謝について回答していた。同じ感謝の内容でも,その相手については,学生と親とで大きく異なり,学生では「友達」,「先生」などが含まれるのに対して,親ではほとんどが「家族」であった。その内容を感謝した年齢の平均は,学生においては,感謝の内容の種類によってばらつきが少ないが,親においては,感謝の内容の種類によって過去から現在まで広い幅があることが示された。

キーワード:感謝,支援系,充実系,大学生,親